

## 白井寿庵書入『職原抄』解題

田村, 隆  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8955>

---

出版情報 : 文献探究. 44, pp.61-65, 2006-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 白井寿庵書入『職原抄』解題

田村 隆

一

九州大学文学部に貴重書として所蔵される『職原抄』の一本がある。正保二年刊の板本で後印本とおぼしいが、注目されるのは表紙に打付書で「職原抄 全 鼈頭傍書白井寿庵也」と記される点で、ほぼ全丁にわたって丁寧な書入が見られる。白山芳太郎『職原抄の基礎的研究―並びに校本―』（神道史学会、昭和五十五年）や加地宏江『中世歴史叙述の展開―『職原抄』と後期軍記―』（吉川弘文館、平成十一年）に代表される『職原抄』研究史において、本書について言及された形跡はなく、以下に報告する。まずは書誌を記しておく。

所蔵 九州大学文学部。貴重書。  
外題 打付書「職原抄 全 鼈頭傍書白井寿庵也」。  
内題 「職原抄上」、「職原抄下」。  
書型 大本二卷一冊。整版本。  
表紙 黄唐茶色無紋表紙（縦二五・一センチ、横一七・五センチ）。

チ）。改装。右下に請求番号用紙「国文／15A／1」、「貴重書」のラベル。

行数 每半葉九行。

匡郭 双辺。縦二一・二センチ、横一五・一センチ。

柱刻 「職原上」、「職原下」。

料紙 楮紙。

構成 丁数（卷上）四一丁、（卷下）六七丁、計一〇八丁。

刊記 「正保式曆九月上旬重刊／室町通鯉山之町／小嶋市郎右衛門梓行」。

蔵書印 見返しに「九州帝／国大学／図書印」（朱文陽刻）、九州

大学受入印（昭和八年十二月五日）、本文一丁才に「裏辻家蔵」（朱文陽刻）。

備考 もと二卷二冊であったものの合綴本。

随所に墨・朱書の書入。また全卷にわたり、多数の貼紙あり。総数七十四枚。



書入をなしたとされる白井寿庵とは、白雲散人と号した国学者白井宗因の父かと思われる。宗因については、多田義寛『ぬなはの草紙』（寛保三年序）巻二に、

○白井宗因事

寛文の頃、白井宗因といへる人有。神社啓蒙、中臣祓白雲抄など書たり。啓蒙の神社考にまされる事遙にして、その凡例に、神代卷実に取べき事は二三策のみと書たり。此頃までは公家の記録たやすく見る事ならざる時也。もし此人をして、今時に生れしめば、大に故実を探り得て、天下の木鐸ともなるべき人歟。

（『日本随筆大成 第二期卷七』所収）

といった記述も残されている一方、寿庵の名は辞書類の項目にも挙が

らないが、宗因著『神社啓蒙』（寛文十年刊）の跋に次のような一節があり、ここに寿庵の名が見える。

先生名ハ宗因自省ハ其号ナリ大公ヲ曰フニ寿庵ト一祖公ヲ曰フニ宗怡ト一饒老師ノ之高弟ニメ而願神ノ妙術其ノ功籍甚ナリ暨ニ先生ニ蓋シ三世良医ノ之門ナリ

『職原抄』に関しては宗因にも『職原鈔句解』（十二卷九冊、寛文十二年刊）の著がある点からも、表紙に記される「白井寿庵」はこの人物を指すと推測される。右の文章には「三世良医ノ之門ナリ」ともあり、寿庵もまた宗因と同じく、医業の傍ら、故実の研究に努めたのであろう。

ただし、本書の書入を寿庵自筆とするのはいささか躊躇われる。本書の書入にはしばしば誤字を見消で改めている箇所が見られるのである。これらの訂正は、書入本文と同筆である。例えば、「四位ハ浅紫」の「浅」に見消を施し傍に「薄」と添えたり、「参議」の「議」に見消を施して「政」と記すなどの例があり、これらは転写の際の誤りかと思われる。

二

書入から、寿庵は本文批判にかなり配慮していることが窺える。以下、『職原抄』本文の引用には、参照の便を図って、（ ）内上段には

正保二年版の、下段には無刊記版の丁付を付す。

まずは、「異本」注記について。本書には次のような指摘が随所に見られる。

昔八百人云々―異本昔有大舎人八百人云々（上一八ウ／二〇ウ）

見式部丞之所―異本ニナシ（上三〇オ／三三ウ）

前者の書入について、白山氏の校本を確認すると、底本の梅沢本をはじめ写本系の本文には、「異本」にありとされる「大舎人八百人云々」が存在することがわかる。寿庵は板本以外に、写本系のテキストをも参照している。また後者の書入についても、校本によれば甘露寺本と中本康雄本には「見式部丞之所」の六字があるという（白山氏は「見式部……」とするが「武」は「式」の誤植であろう）。これは、写本系の本文の中でも、甘露寺本や中本康雄本ではなく、梅沢本に近い系統の本文が寿庵書入にとつての「異本」であったことを示唆しているよう。

また、次のような書入もある。

職原抄下―伏見殿蔵板本無職原抄下四字（下一オ／一オ）

伏見殿本或人云々嘲耳降一格在此下無職原抄下卷終六字

（下四二ウ／四七ウ）

此抄者―伏見殿本無此跋

（下四八ウ／補遺六ウ）

而父雖坊官―伏見殿本有為字（下五四オ／後附六ウ）

このように、「伏見殿蔵板本」、「伏見殿本」に言及する書入が散見される。これは、いわゆる伏見版のことで、川瀬一馬『増補古活字版之研究』（The Antiquarian Booksellers Association of Japan 昭和四十二年）には「在来往々にして慶長勅版と誤認せられるか、或は坊刻本中、版式の極めて美事なるものとして扱はれてゐた職原抄（一冊）の一本が、勅板集影所収、図書寮尊蔵及び静嘉堂文庫蔵勅版職原抄とせるもの、実は勅版にあらで、宮家御板なり。帝国図書館蔵本に拠つて、伏見宮家の御板なる事が判明したのである」と説明される。国会図書館本には、「此職原抄者伏見宮中務卿邦永親王御家板也宝永乙酉歳拝領之永可為家蔵者也 右京大夫賀茂縣主清茂」という奥書が見えるのである。



前頁の図版は「伏見殿本或人云々嘲耳降一格在此下無職原抄下巻終六字」の書入箇所である。実際に伏見版に就いて確認すると、書入の指摘と符合する。また、これも川瀬氏が指摘するように、「慶長勅版には存しない後附の百官の部分二十葉を附刻してある」という点において、伏見版は慶長勅版と区別される。下五四才の例「而父雖坊官一伏見殿本有為字」は後附の部分に関する書入であり、慶長勅版に後附が存しない事情から、この書入は寿庵が慶長勅版でなく、歴とした伏見版を参照したことを保証してしよう。

尚、前述したように、寿庵の子息白井宗因には『職原鈔句解』の著があるが、両者を比較・検討するかぎり、直接の影響関係にはないように思われる。ただし、『職原抄』本文に関して、例えば主税寮の一文、

当頭助<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>重任<sup>ニ</sup>給<sup>レ</sup>爵之後任受領<sup>云々</sup>

(上三〇ウ／三四才)

について、寿庵は「当」と「頭」の間に朱書で「寮」の字を補うが、『句解』本文も「当寮頭助」に作る。また大蔵省の、

周礼地官吏部之属敷

(上三四才／三八才)

についても、寿庵は吏部の傍に「戸イ」と書入れており、『句解』も本文は「吏部」のままであるものの、「然バ戸部ト云フ以テ可ナリト云ハンカ」との注記がある。これらは、『句解』に「大全ニハ寮ノ字アリテ有無難決也」、「案ニ新刻ノ本ニハ戸部トセリ」とあるように、

植木悦『職原抄引事大全』（万治二年刊）においてすでに示された改訂本文であった。後者の「戸部」は、延宝七年版『職原鈔』にも継承される。寿庵書入本と『引事大全』との前後関係は定かでないが、両者とも『引事大全』の改訂本文に関連する記述が散見される点は注目される。

### 三

寿庵の書入に引用される書物は、有職故実関係を中心として多岐にわたり、史書・記録類のほか、『万葉集』、『古今著聞集』や、『源氏物語』さらにはその注釈書『河海抄』にまで及ぶ。この他、唐名に関する書物とおぼしい『法家明句抄』や、『職原抄』の講義録と思われる「御講」などの引用もある。これらの書物は傍証として挙げられるものもあれば、中務省について「源氏物語ニ桐壺ノ更衣ト書モ桐壺ニ御座故也。此舎ノ前ニ桐ヲ栽タルニ依テ名付ル也」と記す類の、啓蒙的な内容を持つ書入も多く見られる。

また、林靖『本朝遼史』（二巻二冊、寛文四年刊）、宇都宮由的『日本古今人物史』（七巻七冊、寛文九年刊）、松下見林『異称日本伝』（三巻十五冊、元禄六年刊）の三著についても比較的長文にわたって引用がある。いずれも引用本文は板本とほぼ完全に一致する。寿庵の生没年は全く未詳ながら、特に『異称日本伝』の刊行年などは子息宗因の時代よりも下るほどであるから、あるいは後人の書入が混入していると思われるかもしれない。

さらに、書入のうちもう一点注意しておきたいのは、本書に四箇所

見受けられる「季忠考」の貼紙である。これらは他の書入とは明らかに別筆である。四例中三例が『中右記』の引用という、いささか偏りのある内容であるが（残り一例の引用もやはり古記録の『玉海』『玉葉』である）、この季忠は、書誌に記した「裏辻家蔵」の印記と考え合わせれば、あるいは維新时期に活躍し、柴山典編『華族類別譜』（屏山書屋、明治十三年）下巻第五十四類などに名が見え、大佛次郎『天皇の世紀』にも「侍従裏辻公愛」、「裏辻中將」としてしばしば登場する裏辻公愛（文政四―明治十五年）のことであるかもしれない。公愛の初名は「季忠」であった。この「季忠」であるとするならば、これらの貼紙は旧蔵者が後に付け加えたものと解することができよう。



このように、本書は寿庵自身の書入と考えることに慎重であるべき箇所が若干見られるものの、書入に見られる様々な出典注記は、寿庵

の博覧強記を十分に証するものであり、また伏見版や写本系の異本を広く参照しつつ、本文の校訂にも努める姿勢は高く評価できよう。『職原抄』の研究史において、本書の存在はこれまで全く触れられなかったが、『国書総目録』等に著録される各種の注釈書に加え、この寿庵書入本も近世『職原抄』研究の成果の一つとして、また宗因に比べて人物像がいまだ不明瞭な寿庵自身を知る手がかりの一つとして認めてよいであろう。

付記

伏見版『職原抄』は宮内庁書陵部所蔵本の紙焼写真により、『華族類別譜』は国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」を用いた。

（たむら たかし・九州大学大学院博士後期課程）